

森田正馬における「我が子」の死

— 「大正生命主義」を通して —

青 柳 路 子

はじめに

夏の夜の博覧会はかなしからずや
雨ちよと降りて、やがてもあがりぬ
夏の夜の、博覧会は、哀しからずや

女房買物をなす間、かなしからずや
象の前に僕と坊やとはるぬ、
二人蹲しゃがんでるぬ、かなしからずや、やがて女房きぬ
三人博覧会を出でぬかなしからずや
不忍ノ池の前に立ちぬ、坊や眺めてありぬ

そは坊やの見し、水の中にて最も大なるものなり
き、かなしからずや
髪毛風に吹かれつ
見てありぬ、見てありぬ、かなしからずや
それより手を引きて歩いて
広小路に出でぬ、かなしからずや

広小路にて玩具を買いぬ、兎の玩具かなしからず
や
……

(1936年12月24日)¹⁾

これは中原中也(1907-1937)の詩「夏の夜の博覧会はかなしからずや」の一部抜粋である。中也は、この詩を歌った前月、息子の文哉を亡くした。この詩には、その悲しみが歌われている。

中也は小学校時代から秀筆で、その原稿の多くが端正にペンで書かれている。恋人・長谷川泰子と小林秀雄との三角関係を綴った『我が生活』や、死の直前に書かれた詩であっても、原稿の文字は変わらず美しい。しかし、その中也の文字が、上記「夏の夜の博覧会はかなしからずや」と、同じく息子の死を悼んで同日歌われた詩「冬の長門峡」で大きく乱れる。どちらも筆で大きく書かれ、一部を乱暴な線で消している。このことは、愛児を失った中也の悲

しみの大きさを物語っている²⁾。

死別bereavementによる悲しみは、今日「悲嘆grief」とされ、悲嘆研究の流れはS.フロイトに遡ることができる。悲嘆は、死別による悲しみの反応であり、さまざまな心理的・身体的反応をもたらす³⁾。人間が生きていく中で、愛する人の死に遭遇することは避けられない。したがって、悲嘆は、愛する人の死に対する人間の正常な反応であるともいえよう。

しかし、死別の中でも、我が子を亡くすことによる悲嘆は、より痛切であるとされている。最も身近な、次の世代を担うはずの子ども。誕生から見守り、強い絆で結ばれ、夢や希望を託してきた存在が失われる、その嘆きは測り知れない。

「教育」が次世代を生み、そして育む営みであるとするならば、先行する世代と後続世代の世代間の連関は不可欠であり、そこでは、次世代の生命の保証が前提とされている。しかし、我が子の喪失は、その世代間の連関を断絶させる。それが、たった一つの生命の喪失によるものだとしても、先行世代から次世代への連関が絶たれてしまうことの意味は大きい。

本論文は、「教育」の対象とされ、「教育」の営みに不可欠な次世代、特に「我が子」の喪失に焦点を当て、次世代の喪失という問題に迫ろうと考える。

この問題を考察するにあたって、本稿は、森田正馬(1874-1938)における息子の死を取り上げる。周知のように、森田正馬は森田療法の創始者であるが、彼もまた一人息子・正一郎を20歳の若さで亡くしている。

森田は、正一郎を失った後、『亡児の思ひ出』にその思い出を綴った⁴⁾。これを書き記した経緯を、森田は以下のように述べている。

「余は、このやうな事を書いて、読む人のためには、つまらぬ面倒くさい事であらうけれども、之を書いて行く余は、ペンを置いては、涙を拭い、またペンを取りては、熱き涙を涙

管の方へ送りつつ書き、彼の日誌を繰りては、溜息をつくのである。そんなら、なぜ・こんな余計な事をするか。只、正一郎の生命の一断片でも、之を此世の記念に、書き留めて置きたいからである。」(『亡児』p.652)⁵⁾

今日の悲嘆研究の原点であるフロイトは、亡き父親に対して沸き起こる様々な心情を洞察し、自己分析を進めることで、父との死別体験を昇華しようとした。フロイト研究者である小此木啓吾は、フロイトの示した3つのアルバイト(ワーク)を「夢の仕事」「機知の仕事」「悲哀の仕事grief work」と整理し、第三の「悲哀の仕事」のうち、死別によるものを「喪の仕事mourning work」と位置づけた⁶⁾。「喪の仕事」について、小此木は、フロイトが父の死を契機に自己分析を進めた結果、「喪」という心理過程を考察することになった点にその特徴を見出す。そして「死者に対する自分の気持ちを、回想録、伝記、あるいは物語や詩歌に託す営みは、フロイトの自己分析の営みと共通した精神的意義をもっている」と述べている⁷⁾。森田による『亡児の思ひ出』も、この例に漏れるものではない。今は亡き息子を回想し、死別後の心情を吐露した『亡児の思ひ出』は、我が子を喪失したことによる親の悲嘆と、世代連関の悲しい断絶を取り上げることを可能にしてくれるだろう⁸⁾。

ところで、森田療法家にして研究者である北西憲二は、森田療法を成立させる「森田学」を次の三層から成り立つものとしている。すなわち第一に、精神療法における「知の体系」である「治療原理、認識体系」、第二に「精神療法の実践と理論」、そして第三に「思想的、文化的背景」である⁹⁾。

本論文では、上記のような広範囲に及ぶ「森田学」を論じることはできない。ましてや、創始者・森田正馬から今日に至るまでの森田療法の展開を視野に入れることは不可能である。しかし本稿は、微力ながら、「森田学」が形成される一過程、つまり森田の人生における息子の喪失体験を、その著述にしたがって丹念に追うことで、次世代の喪失を基点としてあらわれる森田の思想について検討することを目指したい。言い換えれば、本研究は、森田の思想を息子の死から取り上げていく試みである。

1、正馬と正一郎の死

昭和五年、正一郎はこの世に誕生した同じ日に、肺結核により二十歳の生涯を閉じた。その臨終のときの様子を森田は次のように記している。

「殆ど死んでいるとは思はれない。余は慟哭しながらも、何時までも何時までも、この顔をなつかしみ見て居たくてたまらない。」(『亡児』p.616)

普段は患者の顔さえ見入ろうとしない森田が、この正一郎の死顔だけは、名残惜しく目を離すことができないでいた。

正一郎は、森田夫妻にとって結婚後15年目にして、ようやく授かった子であった。それ以前に、妻・久亥は死産と流産を経験していたから、息子の誕生の喜びは一入であったことだろう。森田は子育てにも積極的に携わり、寝ている息子の傍らで、妻と交代しながら一晩中団扇で扇子通すなど、多くの愛情を注いだ。

しかし、正一郎は生来、病気がちであった。『亡児の思ひ出』には、正一郎の生涯の病日総計が算出されているが、それによれば病気を患った年月は、4年9ヶ月に及ぶ。したがって、その生涯の4分の1を病日が占めることになる。

正一郎が病気に悩んだ人生を送ってきたとはいえ、森田にもたらされた愛児の死の衝撃は甚だしいものであった。

「あの、あれほどの希望・趣味・努力・憧れが、一朝にして奪ひ去られたのである。『自分はきつと、お父ちゃんの後が継がれる』と、嘗て母にいつた事もある。この一人子の破滅である。只我等は、此絶望の悲しみがあるのみである。」(『亡児』pp.620-621)

言うまでもなく、森田にとって正一郎の死は、正一郎と共に生きるはずの、その後の人生の喪失であり例えようのない悲しみをもたらした。

高度に医療化されている今日の現代社会では、子どもの闘病生活において、親が子どもに対して何もできないジレンマを抱えてしまうことが報告されている。しかし、それは医療の発達を問わず、自宅で息子を看病をしていた森田も同様であった。まして、森田は医者である。正一郎の闘病中にあれこれ看護

婦に指図することはできても、「正一が咯血すると驚き惑って、手を下すこともできない」¹⁰⁾。食欲不振であれば、好物を食べさせることと、体を労わりつつ滋養を取ることとの間で腐心する。看護婦や周囲の人間と違って「只親の身となつては、必死である」¹¹⁾。しかし、正一郎の命を救うことは叶わなかった。

『亡児の思ひ出』では、森田が正一郎の死について振り返り、「残念」と書き記していることが4つあげられている。まず、正一郎が咯血したとき、自分も肺病のために臥せていたため、親として正一郎のためにするべきだった相当の注意を怠ってしまったこと。次に、咯血した身の正一郎を、療養させずに勉強のための講習に通わせてしまったこと。そして、肺の検査で異常が認められなかった診断を疑うことなくそのまま受け入れ、再診を依頼しなかったこと。最後に、病を癒すために栄養回復にのみ神経を注いでしまい、正一郎の肺について配慮を払わなかったことである。

これらの「残念」は、いずれも正一郎の命を奪うことになった肺結核に起因している。結核を未然に防ぎ、早めの処置をすることができなかった後悔によるものといえよう。もちろん、この背景には、森田自身が肺の病を患っていたこと、正一郎も、妻の久亥も森田の体調を気遣い、当初、咯血したことを伏せていたという経緯があった。しかし、息子の死という現実は無念さは禁じえない。森田の「残念」には、自分と同じ病気で息子を死なせてしまった、父として、また医者としての心残りとして、「生きていてくれさえしたら」という思いがにじみ出ている。

2、親となること

—「小我」から「大我」への広がり—

森田は、息子を亡くす以前に肉親の死に遭遇している。

森田が十二歳の時には、生後間もない妹が亡くなった。その死を嘆き悲しむ母親に対して、当時の森田は「何も知らぬものが、何の可愛想ぞ」という思いを抱いた。しかし今や親となった森田は妹の死で抱いた思いは、「親の方の心持からみたのでは・なかったのである」と振り返る¹²⁾。

それでは、森田にとって子をもつこと、親となることは、どのように理解されていたのだろうか。そ

れは次の一文に端的にあらわれている。

「親の子に対する心は、子は自分の分身又は未来身であつて、其子の幸福と将来の希望とは、其親の心の大部分をなすものである。」
(『生』p.215)

子どもは、その将来も、親から子への希望や夢も含めて、親の一部なのである。

このことは、森田学説での概念「小我」と「大我」と重なり合う。

「三十歳、四十歳となれば子が出来、種族保存慾といふものも加わり、慾望は拡張し、自我を延長し、所謂小我が大我に拡がり、子の愛のためには直接自己の慾望と恐怖とを没却し、子の生存保障のためには、隣人、社会を愛するといふ行動にも及んでくるわけである。従つて此年になれば児童のやうに衝動的ではなく、又青年の如く単に自己中心的でなく、思想穩健になつて来るのである。」(『生死』pp.106-107)

森田における「小我」とは、神経質患者が変質する「我」であり、閉ざされた「我」を意味する。この「小我」から、開かれた大きな「我」へ。森田にとって子をもつこと、親となることは、神経質者がとられから脱するように、「小我」から「大我」へ至ること、すなわち「自我の拡張」を説くに最もふさわしい現象であった。

また上記の記述には、三十から四十歳の、いわゆる親となり次世代を育む人生時期になってこそ「自我の拡張」は可能となり、また実感されるという森田の視点があらわれている。

そして、この「大我」は、更に拡がりをみせていく。

「…更に進んで兄弟・親友・子弟・隣人・同郷の人等に対して拡張し、其苦樂を苦樂するやうになる時、次第に自我といふものが、大きく發展して行くのである。」(『生死』p.234)

森田によれば、「大我」は、我が子のみならず、家族や隣人へと拡張し、ひいては自らが生きる社会、そしてより多様な生命を含む宇宙全体へと拡がっていくことになる。その拡張の過程で、「自我」は發展を遂げていく。

息子を授かり、育むことで、森田自身も己の自我が「大我」へと拡がるを感じていたことだろう。また「自我の拡張」と題して、森田は「教え子の名

の世の人に知らるゝを我事のごとくうれしみにけり」と歌っている¹³⁾。次世代との連関に注目すれば、教え子や弟子たちの活躍も、森田にとって大きな喜びであった。

しかし、森田の自我を「大我」へ至らしめた正一郎は、その死により失われてしまう。正一郎の死は、森田の「大我」にどのような影響を及ぼしたのだろうか。

息子の一周忌が近づいた頃の思いを、森田は以下のように述懐している。

「余は天にも地にも、只一人の子を生し得て、無上の幸福を体験した。こんな有難い事はない。余は正一郎によつて、二十年の幸福を得た。而し此二十年以後の永久の幸福が、一朝に奪はれた事が、無上の悲しみである。只それ丈である。何はともあれ、慈恵医大へ入学さへすれば、先は大体の見当がつく。(中略)大学生となれば、早く嫁を貰つて、親も安心しようと思つて居たのである。」(『亡児』 pp.715-716)

正一郎が亡くなった後となつては取り返しのつかないことを思い巡らす。こうした思いは「徒らなる慾ばりであり・無理な冒険であり・却つて我と我身を苦しめ・さいなむ処の・繰り言であり・迷妄である」¹⁴⁾。そう理解していても、我が子にかけた思いは拭いきれない。正一郎の成長と共に、その将来に抱いた展望、自分の後継者として望んでいた森田の夢も失われてしまう。正一郎へと延長していた森田の「自我」は、我が子という対象と、親の心の大部分を占める我が子の将来や希望も喪失することにより、その一部を損失してしまったことができよう。

3、森田の「発達観」における「生の欲望」と「死の恐怖」—青年期に注目して—

ところで、『亡児の思ひ出』には、正一郎の学校での綴り方の記録、手紙や日記、随筆なども収録されている。森田らが介抱する中、正一郎の心境はいかなるものであったのだろうか。ここでは特に、闘病中の正一郎の手紙や手記に注目してみたい。

以下は、開成中の師であった松本先生への手紙である。

「先生もお存じの、私の親友の乾は、やはり

僕のやうな病気で、既に去年・家を飛出しました。翌日つかまつたさうですが……さういふ事を思ひ出したりして、ほんとうに、自分もやつて見られるやうな気のする時もあります。然し父や母の事、又自分の事を考へれば、そんな大それた事は、この気の小さい僕としては、出来ない筈です。が、陽も西に沈み、四邊が静かになつた時、窓の下を行く人の足音が次第に遠ざかつて行くにつけても、階上に起る時々の笑声を聴いても、現在・床の上に横はつて居る事が、生活の全部である僕を見出し、例へやうのない孤独の苦しみを感ずります。黙々と苦しみを苦しみとして、我慢して来ましたが、近頃ほんとうに苦しく、乾の二代目を実行したくもなつて来ます。…」(『亡児』 pp.705-706)

乾は、正一郎の親友で、同じ病に思い悩み、家出を試みた人物である。正一郎は、ただ床に横たわつて毎日を過ごさねばならない自分を省み、この親友と同じように家を飛び出したい衝動にかられていた。そこには孤独からの逃避と自由への渴望がある。しかし、苦しみから逃れようと死を選んだり家出をしたりしたとしても、自分のその行為によって両親の嘆くことが容易に推察され、現実にはそうすることができない。

この葛藤をもちき、何らかの解決を見出そうとしている正一郎の姿が、次の手記にあらわれている。

「生きたくもあり・死にたくもある。煩悶のための死を選ぶのは愚だ。煩悶あつてこそ、解脱がある」

「個人性を發揮した所に、涅槃がある。」(『亡児』 p.658)

煩悶を抱える闘病の中、正一郎の精神の拠り所は「解脱」「涅槃」だった。

これらの正一郎の手紙や日記などを繰りながら、森田は、いったいどのような思いを抱いたのだろうか。その一端を、森田の「発達観」から垣間見ることができる。

森田の「発達観」では、正一郎の年齢、つまり青年期について、次のように述べられている。

「十七歳、二十歳となれば、生殖欲も勃興してきて、生の欲望の最も盛んなる時代である。従つて死の恐怖も最も強く、此欲望と恐怖と

の間に、思想の葛藤を起して苦悶懊悩するやうになる。神経質やヒステリーの起るのは此時期に最も多い。」(『生死』 p.106)

ここで触れられている「生の欲望」は、森田学説で重要な概念である。森田によれば「生の欲望」とは、「自己保存慾、生殖慾、種族保存慾」などの生物学的な生きるための欲求であり、また人間としてよりよく生きたいと願う「やむにやまれぬ向上心」である¹⁵⁾。特に後者について、森田は「少しでも進歩し、発展したいのがわれわれ本来の欲望」であるという。一方、これらの「生の欲望」を脅かすのが「生」を否定する「死」である。したがって「死の恐怖」は「生の欲望」の対概念となる。

さて森田は、青年期を「生の欲望」、すなわち、生きようとする意志が最も高まる時期と理解する。しかし、それに比例して、死んではならないという「死の恐怖」も青年期に最も顕著となる。つまり、森田における青年期とは、生きたいという欲望と、死を恐れることの両極の間で最も葛藤する人生時期ということになる¹⁶⁾。

このように森田が「生の欲望」と「死の恐怖」を論じた背景には、森田が十歳のころ地獄絵を目にした恐怖体験がある。この経験により森田は死を極度に恐れることとなるが、それに死線をさまようような闘病経験が拍車をかけた。前述した青年期をはじめ、森田の「発達観」には、森田自身の、死と対峙してきた人生背景による影響は無視できない。

では、当の正一郎はどうであったか。もちろん、次の成人期へと人生が開かれた青年と、病に侵され死と向かい合っている青年とを同等に論じることができない。しかしながら、正一郎は、「生の欲望」と「死の恐怖」との最も大きな葛藤を抱えると森田が理解した青年期に、他ならぬ自己の生死の問題に取り組みねばならなかった。人生段階としての青年期の問題と、正一郎自身の生と死をめぐる葛藤とを重ね合わせながら、森田が正一郎の残した言葉を受け止めていたことは推測されよう。

4、森田の思想と「大正生命主義」

それでは、森田自身は「死」をどう理解していたのだろうか。以下に「死は改造である」というテーマで述べられた箇所を引用してみよう。

「余は人生を斯くの如く観ずる。人が生れて、

芋蟲のやうな時から、死に至るまで、食慾といふものがある。之によつて、人は発育し、生命を保持して、四角八面に活動する。其の身体が荒廃し、其の活動の機能が衰退するに至って死滅する。単細胞動物が、常に二つに分裂・繁殖して、其の親の死といふものが無いやうに、又菊は枯れても、年々に其芽生へがでるやうに、人間にあつても、其の身体内の細胞から、之が分裂・増殖して、親と同じ人間が成育し、又芽生のやうに、子孫が増殖して行くのである。されば人生といふものは、永久の活動が目的であつて食慾は方便であり、死滅は身体の変換・改造・発展であるといふことが出来やうと思ふ。」(『生』 p.257)

生命を維持するための食欲は「生の欲望」の一つである。生まれた時から死に至るまで、人間には、食欲に代表される「生の欲望」がある。また、微生物が細胞分裂を繰返すことで種を維持していくやうに、人間も親から子へ、そしてその先へと世代が受け継がれ、種が持続していく。森田にとって人生は、世代を通して受け継がれる絶え間ない活動である。そして「死」は、身体の滅亡であると同時に、新しい世代を育む「改造」の契機であり、「発展」の契機であるという。

森田の「死」の認識、そして人生観は生物学的見地によっており、個人の生と死は、人類という種の、大きな生命の流れに回収されていく。この森田の思想にあらわられている人間という一個体と、人類という種との関係には、「個体発生は系統発生を繰返す」というテーゼで知られるE.ヘッケルの思想が垣間見られる。

また、次の生と死に関する記述には、H.ベルグソンの影響も見出すことが出来る。

「ベルグソンは流動哲学というものを唱え、物の本質は流動であつて、そこに創造的進化があるといつている。物に変化がなければ、そこには現象がなく、物そのものもない。生物にはここに新陳代謝ということがある。生死、生殖もまた新陳代謝であつて、これがあるために進化退化ということがあるが、ここに創造的進化ということが行われている。」(『戀愛』 p.197)

森田はベルグソンの哲学に賛同し、生と死を含めて、人間存在を絶えざる変化の連続としてとらえて

いる。そして心身一元論を採る森田は、人間の心もまた同じく変化の連続であり、「心は周囲の事情の変化に連れ、常に絶えず移り変わるものである」という¹⁷⁾。「生の欲望」にみたように、人間の「基本性」を「向上し、真の文化に進歩する」こととした森田は、人類という大きな生命の流れの中に、人間個人が移り変わり向上していくこと、そしてその生と死を位置づけている¹⁸⁾。

さて、ここで森田の生きた時代に目を向けてみよう。森田が活躍した大正期は「大正生命主義」とされる時代である。この「大正生命主義」には、ヘッケルやベルグソンをはじめ、W.ジェームズ、クロポトキンら、西欧の19世紀から20世紀初頭の思想が大きく影響した。その影響は、上記の「死」と「生」に関する記述からも明らかなように、森田の著作に如実に見出すことが出来る。

鈴木貞美は、「存在を貫いて流れる普遍的な<生命>を、いかに発揮すること、それが文化的な創造になるという思想が『大正生命主義』の基調である」という¹⁹⁾。森田における死は「改造」であり、あたかも「新陳代謝」のように、新たな生を生み出す契機であることは先に見た。そして人生は「永久の活動」であり、「人間も向上し、真の文化に進歩する」こと。森田の、これらの言明は、まさに「大正生命主義」と基調を同じくしているといえるだろう。

また、同じく鈴木によれば、「大正生命主義」は『生命』によつて、自我の普遍性を保持する根幹である²⁰⁾。先述した森田における「大我」、すなわち、自己のみならず、我が子や家族、隣人、人類という「生命」へと拡張していく「自我」もまた、このような「生命」感に支えられて形成されていると理解できよう。森田は、紛れも無く「大正生命主義」の趨勢の中を生き、その思想を共有していたということになる²¹⁾。

しかし、ここで私たちは、森田における息子の死へと、立ち戻らなくてはならない。すなわち、「大正生命主義」に位置した森田における「死」の問題である。

森田の「大我」たる「自我」は、息子・正一郎の死により、その一部を損なうこととなった。それは人類や社会、更に自然界から宇宙へとつながっていくはずの「生命」のゆらぎ、「自我の普遍性」のゆらぎである。このゆらぎは、森田にどのような影響

をもたらしたのか。

森田は、正一郎の一周忌が迫ったころ、次のように記している。

「正一郎のある時は、正一郎の行く末を見定める迄は、死んではならぬ・といふ恐怖があつたが、今は何とはなしに、死ねば正一郎のそばに行かれる・つまり同じ運命の行く道をたどる・といふ気持がするのである。」(『亡児』p.711)

森田は「原始仏教で、死して後、魂が離れて、彼の世に行く・とか考へる事は、死の悲しみの苦痛を紛らわすに、最も軽便な手段たるに相違ない。凡夫の人情、無理もない」と考えていた²²⁾。しかし、「正一郎のそばに行きたい」という森田の言葉は「この世」から「あの世」への「死後の生」を予感させる。森田は「死後の生命」により、永遠の生命を得ようと望んでいるのではない。そこにあるのは、むしろ、端的に「死」の後へも連なっていく生命のあり方であり、「凡夫の人情」と切り捨ててしまうことはできない切実さを伴っている。

西田幾多郎・鈴木大拙・西谷啓治らの思想を「二人称の死」からとらえようとした浅見洋は、その初発の問題関心を次のように記している。

「哲学的には古来<汝の死>として問われてきたこの死の直視を(中略)リアルな自己認識と世界理解、換言すれば哲学的・宗教的思索が立ち現れる源泉として考えたい。二人称の死の自覚とともに<自己の死>の自覚が生まれ、その自覚から<ひとはどこから来てどこへ行くのか>、<私は何のために生きるのか>という哲学的な思索が立ち現れる。」²³⁾

本稿の冒頭に引用した中原中也は、<汝>である息子の死後、詩風が一変したと言われるが、宗教に対する考え方も変わったという。関口隆克によれば、中也は、子どもの死以前はキリスト教のカソリックを信奉していたが、死別後には、それまで忌避していた仏教を懐かしみ、亡き子が西方浄土に嬉戯していると説く仏教の説が意義深く思えると語ったという²⁴⁾。

「二人称」の我が子の死は、人に何をもたらすのか。

森田は息子の死により「死後の生」に意味を見出している。我が子の死という次世代の喪失の問題は、少なくとも森田においては、「死後の生」という

「この世」から「あの世」へと連続する「生」のあり方をもたらすものであった——より厳密に言うならば、「死後の生」を見出さずにはいられなかった、ということができらるだろう²⁵⁾。

おわりに

本論文では、森田正馬の「我が子」の死を取り上げ、森田の思想を「大正生命主義」と関連づけながら考察してきた。

森田にとって、子をもつこと、そして次世代の存在は「自我」を拡張させ、普遍的なものへと至らしめるものであった。しかし息子・正一郎の死は、その自我の普遍性を損なわせる。それは、森田が生きた時代の、「大正生命主義」という趨勢から考えれば、「自我の普遍性」を支える「生命」概念をゆるがすものということができよう。つまり森田正馬における「我が子」という次世代との連関の断絶は、己の「自我」の根幹を揺るがすものであり、また当時の時代社会に共有されていた「生命」概念そのものへのゆらぎでもあった。そして、このゆらぎの中で森田は、「死後の生」をより確かなかたちで見出し、一つの生のあり方として託していく。

中村雄二郎は、「大正生命主義」に盲点があるとすれば「死のない生命主義になること」であると指摘し、「死を考へない生などありえない」と述べている²⁶⁾。これまでの「大正生命主義」に関する議論では、主に文学、哲学に力点が置かれているため、管見の限り、森田正馬は取り上げて検討されていない。しかし、息子の死をはじめ、死を深く自覚してきた森田の思想は、「大正生命主義」の盲点を切り開く、何らかの手がかりを提供してくれるように思われる。

また、鈴木貞美が「大正生命主義」には見出しにくいと述べている「死後の生」についても、森田（そして中也）における息子の死にみるように、「二人称の死」に寄り添うことで、検討していくことが可能になるのではないだろうか。

最後に、「死」という問題に関連して、森田療法の今日の動向を記しておこう。

癌といえば、全治例も報告されているものの、未だ生命を脅かす病であり続けている。それら癌をはじめとする難治疾患患者に対しても、森田療法によるアプローチが用いられている。特に注目すべきは、

リーベンバーグ (Libenberg) による報告である²⁷⁾。彼女はアメリカのスロンケタリング癌センターでソーシャルワーカーとして癌患者のメンタルケアに従事した。

医学、そして治療法の進歩によって、多くの癌は緩やかに進行する慢性疾患という性格を帯びつつある。リーベンバーグによれば、長期にわたり心理的援助を必要とする癌患者に対して、森田療法的アプローチは、闘病の中、没却してきた自己発展の欲求、すなわち「生の欲望」に改めて気づき、その実現、すなわち、よりよく生きようと歩みだすことによって、彼らの生をより充実したものにしていくことができるのだという。難治疾患により、死の恐怖を抱えながらも、自らの生きようとする意志を見出していくことに、森田療法は貢献している。日本においても、同じような視点から、伊丹仁朗らが癌患者を対象に、森田療法を基礎とした「生きがい療法」を実践している²⁸⁾。

森田は病の床で幾度か自分の死を予期したときのことを振り返って、次のように述べていた。「人は、死ぬる今はの際まで、死なゝいものと思つて居るのである」²⁹⁾。人が死を迎えるその時まで、自分は死なないと思っている。このことは、森田の思想から理解すれば、死を迎える時まで、人間には生きようとする意志、つまり「生の欲望」があるということである。森田自身の、死との対峙、そして息子や妻などの肉親との死別を経て練成されてきた森田療法は、より身近に「死」と取り組む人間の問題というその出発点へと立ち返りつつあるといえるのかも知れない³⁰⁾。

註

- 1) 大岡昌平編『中原中也詩集』岩波書店、1981年、pp.430-432
- 2) 朝日新聞、2004年4月14日 夕刊より。
- 3) この定義は*Handbook of Bereavement Research: Consequences, Coping and Care* (M. S. Strobe et al., American Psychological Association, 2001) に拠る。Handbookと呼ぶには相応しくない800頁にも及ぶこの大著は、レビューも豊富に掲載されており、今日の悲嘆研究の広がりを行うかがわされる。私は、悲嘆勉強会でこの本と出会う機会を得た。なお、通例「悲哀」と訳されるmourningは、心理学的にはgriefと互換的に用いられるが、社会や文化

- 的集団において慣例として形作られている、悲嘆の社会的な表現やその行為とされている (ibid. p.2)。ここで簡単に悲嘆研究の歴史を追っておくと、20世紀半ばのフロイトやリンデマンなどの理論的分析の段階から、近年ではケアの重要性により、悲嘆を個人内のプロセスから、個人間の問題/社会的・文化的背景の問題へと拡大し、より洗練された方法論を模索し、精巧な理論を構築しようとする今日の動向へと至っている。
- 4) この『亡児の思ひ出』は、雑誌「神経質」誌上に掲載され、ほぼ一周忌を迎えるまでにまとめられ、後に私家版として出版されている。
- 5) 森田正馬の著作は『森田正馬全集』(白揚社、1974-1975年)に拠った。本稿での特に註としての引用は、以下のように略記する。『亡児』…『亡児の思ひ出』/『生』…『生の欲望』/『戀愛』…『戀愛の心理』/『神経質者』…『神経質者の人生教訓』(以上、全集第7巻より。)『生死』…『生の欲望と死の恐怖』(全集第3巻より。)なお、森田の著作は近年、新漢字の現代語で出版されていることもあり、本稿では差し障りのない範囲で、旧漢字を新漢字表記に直して用いている。
- 6) 小此木啓吾『フロイト思想のキーワード』講談社、2002年などを参照。付言しておく、小此木はgriefを「悲哀」、mourningを「喪」と邦訳している。
- 7) 同『対象喪失』中央公論社、1979年、p.100
- 8) 森田は18歳のときから日記をつけ続けた。日記とはいうものの、日々の出来事を1、2行で書き記した簡略なものに過ぎないが、内容は年賀葉書の枚数から、自分の失敗、友人との喧嘩などから、人によっては書くのが憚られるような性のことまで書き残している。この日記をもとに、森田は後年『我が家の記録』を書き起こしているが、『亡児』もまた、日記をもとに、正一郎の生い立ちを詳らかにしたものである。
- 9) 北西憲二「知の体系としての森田療法 I : 序論・森田の病跡の関連から」(『精神療法』第29巻 第5号) pp.576-584
- 10) 『亡児』 pp.621-622
- 11) 『亡児』 p.659
- 12) 『亡児』 p.716。この外、森田は、正一郎の死以前に肉親の死を経験しており、高等学校時代に伯母を、大学卒業後に日露戦争で弟を、正一郎の死の7年前に父を亡くしている。そして正一郎の死から5年後、森田を支えてきた妻の久亥にも、その突然の死により先立たれ、晩年には母の死を迎えた。
- 13) 『生死』 pp.198
- 14) 『亡児』 pp.717
- 15) 『生死』 p.106。森田正馬(水谷啓二編)『新版 生の欲望:あなたの生き方が見えてくる』白揚社、1999年、p.269
- 16) 森田の「発達観」の、その他の人生段階をみておこう(『生死』 pp.106-107)。
- まず幼児期は「まだ生命の活動が十分に現はれないで、芋虫のうごめきのやうな生活である。不快の気分が起これば、もがき泣いて、他の保護を求め、不快が去れば又すやすすと眠る。(中略) 此幼児の心を禪の悟りにたとへる事があるけれども、それは単に物に執着がないといふ点に於てのみであつて、実際に於ては、其内容と活用が違ふのである」とされ、「生の欲望」は未だ方向性をもつには至っていない。次に児童期。「其生の衝動は益々盛んになつて来て、之を成人に比べれば、恰も躁状態に於けるが如く、絶ゆるひまなく活動し、又ヒステリーに於けるが如く、気分が変り易く、忽ちにして笑ひ又怒るといふ風である。其生の欲望は強いけれども、単純であり、粗雑である。従つて、死の恐怖も単一であり、当座限りのものである」。森田によれば、児童期は「生の欲望」が高まるものの、一貫性をもたないため、「死の恐怖」も持続するものではない。その後、本文で引用した青年期、成人期を経て、五十歳以降については以下の通り。「五十歳、六十歳となれば、今度は身体機能は次第に退行変成に向ひ活力が減退し生の慾望も乏しくなる。此に相当して死の恐怖も激烈でなくなつて来る。此は生活体に於ける自然の現象であつて、之を以て直ちに経験と修養との結果とのみ考へてはならない。八十歳、百歳となれば、身体精神の機能は萎靡退縮して衝動を失ひ、気力がなくなり、思想判断もなくなり、生の欲望も死の恐怖も消滅して、恰もタドンの火の消えるやうに其生命を終る事になる。」
- 人生後半期は特に生物学的見地に偏っているきらいがあるが、「生の欲望」と「死の恐怖」から人生段階をみようとする興味深い視点が示されている。なお、この森田の「発達観」を今日的に発展させたものとして、岩井寛(『森田療法』講談社、1986年、pp.23-38)、田代信維ほかによる「精神分裂病への森田療法的接近」(『季刊 精神療法』14巻、1995年、pp.55-66)などがある。
- 17) 『生』 p.421。森田とベルグソンの思想の詳細な検討については、大谷孝行「森田正馬とアンリ・ベルグソン」(『人文社会学部紀要』富山国際大学、2001年、pp.51-

- 60)などを参照。
- 18)『生』p.217
- 19)鈴木貞美「『大正生命主義』とは何か」(同編『大正生命主義と現代』河出書房新社、1995年)、p.9
- 20)同、p.9
- 21)教育に注目して、森田に影響を与えた人物としてあげられるのは、M.モンテッソーリ(1870-1952)である。森田はモンテッソーリの教育法・治療法を高く評価していた。森田とモンテッソーリの比較研究としては、坂本堯「M.モンテッソーリの心身解釈(I):森田療法との関連より」(『心身医学』1977年、pp.318-319)、坂本堯・岩井寛「森田療法とモンテッソーリ治療教育の比較研究:自由の作業療法の観点から」(同、p.338)などがある。
- 22)『亡児』p.620
- 23)浅見洋『二人称の死:西田・大拙・西谷の思想をめぐって』春風社、2003年、pp.4-5
- 24)関口隆克「幻想と悲しみと祈り」(吉田熙生編『中原中世の世界』1978年)p.14
- 25)死別した親の悲嘆に関して、Malkinson & Bar Turの興味深い調査報告がある。33年前に戦争で子どもを失った親を対象にイスラエルで行われたこの調査では、自分の死とともに「子どもが永遠に死んでしまう」ことを多くの親が恐れていた。それは現実の息子の死後の、第二の象徴的な死、すなわち親の死による、内的対象としての子どもの死であるという。この調査結果には、我が子の死を経験した親が、自分の死に関連して子どもの死をどう受け止めるかという、森田などとは異なつた見解があらわれている。Malkinson, R.& Bar-Tur, L. The ageing grief in Israel:A perspective of bereaved parents, *Death Studies*, 23, pp.413-431
- 26)中村雄二郎・山折哲雄・鈴木貞美「大正生命主義と現代」(鈴木編前掲書、p.48)
- 27)Liebenberg, J: Morita-based therapy for people with incurable cancer, *Jornal of Morita Therapy*, 11, 2000, pp.71-74
- 28)伊丹仁朗「癌・難治疾患と不安・死の恐怖」(『森田療法学会雑誌』4、1993年、pp.181-185)などを参照。
- 29)『神経質者』より「日々是好日」p.477
- 30)この他、森田療法における興味深い研究としては、本稿で引用した北西憲二が、森田療法を「自己中心的な愛と欲望」、すなわち「我執」から生じる苦悩を解決する精神療法と捉え、H.コフートの自己心理学に学び、「東洋的自己心理学」としての理解を深めている(北西憲二『我執の病理』白揚社、2001年)。また「生の欲望」や、森田療法が目指す「純な心」といった心性と、土居健朗の「甘え」、D.ウィニコットの「本当の自己」の基盤とされる「万能体験」との共通性を論じた牛島定信「甘え、自己愛、そして森田療法」(『精神分析研究』45巻 21号、2001年、pp.120-128)などがみられる。
- ※本稿は、若林一美『亡き子へ』(岩波書店、2001年)と悲嘆勉強会から着眼点をいただいた。稚拙ながら論文にまとめさせていただいたことを、若林先生、悲嘆勉強会の皆様、そして出会いのご縁を与えてくださった方々に感謝申し上げたい。

